

# 平成二十年書道講演会

平成20年11月5日  
於・国立新美術館

## 漢字の話

京都大学人間・環境学研究科教授

阿辻哲次



阿辻哲次氏

本日は晴れがましい場所にお招きいただきまして、まことに光栄に存しています。

ただいまは樽本先生から身にあまるご紹介をいただき、またさつと二百名以上の方でしょうか、本当にぎっしり満員にお運びいただきまして、心よりお礼を申し上げます。

世間ではよく「書は人なり」と申しますが、私はあの言葉がきらいです。それは字の上手な方は人柄がよい」ということで、そのこと自体に文句を言う筋合いはありませんが、逆に考えますと、字の下手な人間は悪人だということになるわけです。いまでこそこうしてコンピューターでプレゼンテーションができる時代になりましたけれど、ほんの十年くらい前までは黒板に手書きという形でしたから、書道の方々のお集まりに招かれて黒板に字を書くとというのが

私は本当に嫌でした。ただ幸いなことに、近ごろはこういう電子機器の発達で、その苦しみからは解放されました。

私は印刷屋の家に生まれましたので、文字のつきあいは、家庭環境から始まりました。私は昭和二十六年の生まれですが、私たちの世代の子供たちは大変牧歌的な時代で、いまのように塾やおけいごなどとはほとんどありませんでした。学校から帰るとすぐに近くの原っぱへグロップとバットを持って駆け出して、という方キ大将がたくさんおりました。宿題を学校から帰ってすぐにするような殊勝な子どもなどいませんでしたし、日が暮れるまで外で遊んでいたものですが、やっかいなことが一つだけあり、それは家の手伝いをさせられることでした。

子供たちが忙しい近頃はあまり見かけま

せんけども、私たちが子供のころはクリーニング屋の息子はワイシャツを何枚か配達してから遊びにいかせてもらえまして、タバコ屋の子供は三十分店番してから遊びに行く、という状況でした。

わが家は零細な印刷会社でしたが、私もそれなりに手伝いの仕事が割り振られていました。印刷の注文をいただいたときに、必要な活字が手元にならないことがしばしばおこります。名刺を考えていたとくに分かりやすいのですが、山田商店の山田さんが山田町に住んでいるとして、その「山田」は名前と会社名と住所では全部活字の大きさと書体がちがいます。コンピューターでしたら拡大も縮小も自由自在ですし、書体もいろいろ変えることができますが、活字印刷ではそうはいきません。明朝体はあるけれどもゴシック体はないとか、

零細な企業ではしょっちゅうこういうことが起ります。

そんなときには兄と私が学校へ行っているあいだに、父が活字屋さんへ電話をしておきますので、兄が早く帰った方が注文した注文を取りにいかにされます。兄はそれを見ているかなか帰ってきました。兄はそれで、だいたいは私が行くということが多かったのですが、小学五・六年のころは、自転車で十分ぐらいの活字屋さんへ必要な文字を買いにいこうという仕事をよくさせられました。

ただし我が家も一応はプロの印刷屋ですから、だいたいの漢字はそろっています。だから活字屋に発注するのは普通の漢字の珍しい書体とか、あるいはちょっとやそつとでは使われない文字であって、活字屋さんの店頭で引き取る漢字は、小学校ではとうてい習うはずもないものでした。そのあたりが家庭環境だったので、学校で習わない漢字とそんな形で接触してました。それで小学校高学年のころには少々難しい漢字でもおじけつかないという状態ができていました。

そのまま中学高校、さらに大学に進んで現在にいたりますが、自分の専門を考えるときにやはり子どものころにそういう形で接触していた「文字」に対する思い入れが非常に大きな影響をあたえていると思えます。もともと漢文が好きだったので、大学では中国文学科に行こうと決めていました。が、具体的な専攻を決めるときに、文字を中心とする文化の歴史を研究しようと思っ

たのは、印刷屋の息子として日常的に文字に接触していたことが大きいと思います。文字とは、だれかが、何かの必要があって、何かの素材の上に書いたり印刷したりするもので、その文化的な営みを、中国という非常に長くて大きい土俵の上で考えてみたい、と思ったのが出発点かと思っています。書かれた文字の美しさを追及する立場にはおりませんので、先生方のように芸術作品の中で文字とおつきあいになっている方々とは、文字に対する視点や切り口がちがうという点があるでしょうし、それはあつて当然だろうと思います。

本日はこういう晴れがましい場所にお招きいただき、高名な先生方の前に立たせていただいております。限りは、芸術とは異なった、生活あるいは日常の暮らしの中で文字がどのように発展し、展開されてきたか、なかなか漢字という歴史の長い文字体系について、一緒に考えさせていただければと思っています。

世界に文字はいくつあるのか。これはなかなか難しい問題ですが、インターネットで検索しますと、中西印刷という会社のページに「世界の文字」という項目がありました。これは京都にある印刷会社で、この先代の社長さんが大変な「文字マニア」でした。現役を引退されてから奥様と世界中を旅行され、出かけた国々で新聞や雑誌はもとより、キャンディの包み紙とかはし袋とか、ありとあらゆる文字が印刷された物を積極的に集めて、膨大なコレクションをお作りになりました。その「中西コレク

ション」がいまは大阪の民族学博物館にあります。その中西印刷さんが「世界の文字」というページを作っていたらいいと思います。ご興味がある方は、「中西印刷」というキーワードで検索するとヒットするはずですよ。いったい文字は何種類あるのか。これは言語学の中でもなかなか結論の出せないテーマですが、中西印刷さんのページに書かれていることをそのまま請け売りしますと、世界中で発行されている日刊新聞で使われている文字は、二十八種類あるのだそうです。二十八種類の中には漢字、平仮名、片仮名、ローマ字が含まれていますから、

七分の一はわれわれにもなじみの深い文字ですが、それ以外に見たことがあつた文字といえば、ハンクルやギリシャ文字、あるいはロシア語の表記に使うキリル文字、あるいはテレビのニュースでよく見かけるアラビア文字くらいでしょうか。それでもども半数までいきません。

その二十八種類の中で、われわれは現在、漢字・平仮名・片仮名・ローマ字、そしてまれに $\alpha$ や $\beta$ などのギリシャ文字を使っています。

いまここで皆様方に紙を一枚ずつ配って、「動物園にライオンがいる」と書いてくださいというところ、まちがいないし「動物園」三文字は漢字で、「ライオン」は片仮名で、それ以外は平仮名で書く。これはこの会場のみならず、小学校三、四年生くらいから上の日本人ならまちがちなしにそう書きまします。中には「動物園」という漢字をちょっと度忘れしてしまったということがあつた

かもしれませんけど、それでも「動物園」は漢字で書くことほどは考えています。そうすると約一億人の日本人が、「動物園」という漢字、「ライオン」という片仮名、「が」いる」という平仮名を同じように使い分けするわけですね。これは世界でも日本語だけに特有の現象です。

しかし私たちがいつでも同じように文字を使い分けしているのでもありません。たとえば「ほんほんは、たけのこほんよ。」なども品のない例ですが、これは「動物園にライオンがいる」のケースほど単純ではありません。まず「ほんほん」の「ほん」を漢字で書くか平仮名で書くか。「ほんのこ」は平仮名にするか「御」にするか、「ほん」は飯と漢字で書くか平仮名にするか。これはかなりまちまちでしょう。「たけのこほんよ」も「たけのこ」を漢字で書くか平仮名で書くか、あるいは片仮名で書くかについても、かなりばらつきがあるはずですよ。そう考えると、「ほんほんはたけのこほんよ」には十種類くらいのバリエーションができるだろうと思えますが、しかしどのように書かれても、私たちはその意味をどうも損なうことがありません。このあたりも、日本語以外の文字の書き手から見たら大変不思議な現象であると感じられることがあつた。

そもそも言語を文章で書くときに、二種類以上の文字を使い分けるのは日本語と韓語だけであつて、それ以外の言語はだいたいどこでも一種類の文字で書くものと相場が決まっています。ヨーロッパの文字は

すべてローマ字かキリル文字で書かれますし、南北アメリカの文字も全部ローマ字で書かれます。中国語は漢字で書きますし、アラビアや中近東ではアラビア文字で書きますから、二、三種類の文字を使い分けるというのは、世界的に見てもめったにないことです。

日本語と同じように文字を使い分けている韓国語では、最近ではほとんどハンクルばかりで漢字をあまり使いませんが、それでも「漢字ハンクル混じり文」を書くと思えば書けます。しかし私たちは同じ表音文字でも片仮名と平仮名を使い分けており、韓国語よりもさらに高度な書き分けをしています。

数年前まで私のゼミにイタリヤからの留学生がいました。まるでファッションモデルのようにスタイルのいい美しい女性でしたが、それはともかくとして、彼女がイタリヤで日本語を勉強していたときに、日本人の先生が話す日本語の書き取りをする授業があつて、あるとき課題に「おやつはプリンよ」という書き取りが出たそうです。彼女は「プリンって何だろう。私は知らないけれど、どうやら日本にはプリンというお菓子があつたらしい」と思って、「ぷりん」と平仮名で書きました。先生が「プリンは外来語だから片仮名で書くのよ」と指導すると、「え、プリンって外来語ですか?」あんな、知らない?、こういう甘くて黄色いもの・・・ああ、プディングを日本ではプリンというのですか・・・あの名前は正しくはプディングですね。しかしそれを私

「夢」あたりが人気のある漢字でしょう。私だったら「女」か「酒」を選ぶと思います。が・・・、このように好きな漢字のアンケートをとるとして、たとえば「友」を選んだ方に、「なぜその漢字をお選びになりましたか？」と聞けば、おそろしく「人生では友達が最大の財産である」とか答えられるでしょうし、「愛」を選んだ方は、「いくつになっても愛を忘れてはいけない」と、その自分がお選びになった漢字に即して選んだ理由を説明していただけるはず。

では次に、好きな片仮名をお選びください、あるいはローマ字をお選びください、とうかがってみましょう。好きなローマ字をお選びください、といわれると、少し困りませんか？それでも一応は、「うーん、じゃあT」などと答えが返ってくるでしょうが、しかし「なぜTですか？」と聞けば、「息子の名前のイニシャルである」、「ボーイフレンド、ガールフレンドの名前のイニシャルである」といった、文字とは関係の

ないところで選択がおこなわれていることがわかります。「片仮名を選べ」、「好きなローマ字を選べ」と言われると、ちょっと躊躇します。でも「漢字を選ばなさい」というと、「俺はこれだ」、「私はこれだ」と、積極的に自信を持って選びます。平仮名、片仮名、ローマ字をわれわれは同じように使っているにもかかわらず、なぜ漢字だけにアンケートが成立して、平仮名、片仮名には不可能なのでしょう。それは、漢字を選ぶときにその文字の形や発音を選んでいるのではなく、その文字の後ろに隠れている意味を、実はわれわれは選んでいるわけですね。「愛」という字の形とか「あい」という発音ではなくて、この文字と表裏一体の関係にある「人をいづくしむ」という意味を実はわれわれは選んでいるわけです。

毎年十二月に、「今年の漢字」というのが発表されます。あれは京都に本部を置いています日本漢字能力検定協会、いわゆる漢検が実施するイベントで、去年は「偽」という漢字でした。嫌な文字が選ばれたもの

とこのであれば「今年の漢字」だからいいのですね。「今年の平仮名」だったら何の意味もありません。今年の平仮名は「は」に決まりました、では何のことやらさっぱりわかりません。「今年の漢字を決められるのは、漢字が意味を表しているというところに着目してのことです。だから「今年の漢字」は成立しますが、「今年の平仮名」や「今年の片仮名」、「今年のローマ字」、「今

年のハンブル」というのは絶対にあり得ないわけです。また先生方を目の前にしてまことに釈迦に説法ですが、家を新築したので高名な先生に床の間に掛ける軸の揮毫をお願いいたします。「じゃあ書いてあげよ」となるとときに、その先生がお書きになる文字は、芸術的創意工夫を凝らす面と、書かれた文字や語句で何らかの意味を伝達するということ、二つの要素を兼ね備えているわけですね。意味も成さない文章を床の間に掛けることは絶対にありません。だからたとえは「誠」と二字だけ書いた書は「まるで新撰組のようだが、見る者に対して「真心、誠意」の大切さを訴えかけます。しかしアメリカ人が家を新築しても、高名なグラフィックデザイナーに頼んで書いてもらった「M」という字を、新築のリビングルームに張りつけるということはおそろしくないでしょう。そこに漢字が意味を表すという大きな特徴があるわけです。

文字には「表意文字」と「表音文字」があり、世界中の文字は表意文字が表音文字に大別されますが、先ほど申しました世界で使われている二十八種類のメジャーな文字の中で、表意文字は漢字だけで、それ以外はすべて発音しか表さない表音文字です。

漢字の最大の特徴は、その表意文字であるという点にあります。昔々私たちの先祖は文字を持っていません。やがて隣の大きな国から漢字が入ってきたわけですが、最初に漢字と接触した口

本人は、「いままで」「やま」と口で呼んでいたことをこれからは「山」という形で表現することができるようになることに気づきました。

漢字を使うのにはじめ発音は関係ありませんでした。その証拠に、皆様方は「川」とか「山」とか「海」という言葉をしようちゅう読み書きされるでしょうが、でもほとんどの方はその文字を中国人が中国語でどのように発音しているか、おそろしく存じないだろうと思います。中国語を学習している方は存じでしょうが、「山」は「シャ」と、「海」は「ハイ」と発音いたします。しかし日本語を使うときには「そんなの関係ねえ」で、中国人がその字をどのように発音しようが、そんなこと知ったことではありません。「山」は日本語の「やま」にあたる意味を表すから「やま」と読まれます。同じようにアメリカ人が「海」という漢字を「シー」と読んでも、実はまったく不思議ではないし、「山」を「マウンティン」と読んでかまわないのです。つまり表意文字は話し言葉を超えて、他の言語の中に取りこまれていくことが可能です。

だから漢字はかつて国際的な文字としての役割を持っていました。そのもっともわかりやすい事例を、紹介いたしますと、江戸時代に「朝鮮通信使」という使節が何度か日本へまいりました。徳川将軍が代替わりをする時、朝鮮国王から派遣された使者が江戸城までやってきて、新将軍に就任のお祝いを申し述べるという儀式があったのです。使節は対馬から九州に渡り、瀬戸内

海を大阪まで進み、そこから陸路で東海道を通って江戸へ行くのですが、その大行列を見よと沿道は人であふれて大騒ぎでした。

新將軍就任を祝う使者ですから、途中の三河や駿河など沿道では、それぞれの大名がもちろん盛大な歓迎宴を開きます。通信使一行にはもちろん通訳が同行しています。しかし各地の大名側には朝鮮語が話せる通訳などめったにおりません。しかし大名の側近には儒学者がたくさんいます。その儒学者たちが歓迎の任務に当たり、朝鮮通信使一行と漢字、漢文を使って交流をするわけですね。要するに筆談で交流をするわけです。

朝鮮通信使を迎えるイベントの中で、漢字と漢文が交流面で非常に大きな役割を果たしています。いうまでもなく漢字は古代の中国で作られた文字ですが、その交流の場に中国人は一人もいません。にもかかわらず、日本人と朝鮮王国からの使者たちが交流できるのは、漢字は国際的な文字だからです。そして中国人が一人もいない場でも相互に交流が可能であったのは、漢字が表意文字だったからにほかなりません。

この表意文字であるということ以外にも、漢字にはいくつか大きな特徴があります。まず縦書き、横書きが自由です。このことについては、先生方のように創作活動をやってらっしゃる方はとくににお気づきでしょうし、もっと身近な例では年賀状がそうです。若い方は横書きが多く、年配

の方は縦書きが多いでしょうけども、文字を縦でも横でも自由に書けるというのは、漢字の大きな特徴です。

漢字には「好き嫌いがある」という特徴もあります。漢字には好きな方と大嫌いな方がいらつしゃいます。今日ここにおいでのお客様はおそらく漢字が大好きか、どうかといえは好きだというようの方がいいのではないのでしょうか。

漢字が大好きな方というのは本当に大好きで、かつて私はある年配の方から「ファンレター」をいただいたことがあります。いただいたお便りでは「おまえの本を読んだ。面白かった」とはじめにお褒めにありがとうございます、続いて「私は私は漢字が大好きで、趣味は漢和辞典を通読することだ」と言うのです。その方は「漢和辞典の序文から奥付までずっと読むのだから、これまで五冊読んで、いま六冊目を読んでいる。ついでには貴殿ほどの漢和辞典が一番よくできているとお思いか、高見を伺いたい」という内容の巻紙のお便りを頂戴して、これは困りましたですね。「私は学生時代から、こういう漢和辞典を使っています」というありきたりなお返事を差し上げてお茶を濁したのですが、その方などは異常なまでに漢字が好きなのですね。

その反対に、講義のあとで一人の学生が教卓にやってきて「僕は漢字が嫌いです」と告げました。理学部の学生で、「一番で熱心に聞いている学生ですが「何で漢字が嫌いか？」と聞くと、「小学校のとき、雨が降ってグラウンドで遊べなかったので、教

室で昼休みの時間に相撲を取っていたら、廊下を通りかかった先生に見つかって、罰として百字練習帳に毎日五ページ、難しい漢字ばかり書いてこいという罰をあたらされた。それ以来、僕は漢字が嫌いです」といいます。「それは漢字の責任とちがう。君が教室で相撲を取ったのが悪いんだ」、「それですけども僕は漢字が嫌いです」、「それならどうしていつも一番前で聞いているの?」「僕は情報科学をやっていて、コンピュータにおける記号論が専門です、記号の一種として文字をとらえるために授業

に出ていきます」と答えました。大変優秀な学生で、卒業して十年近くなりますが、いまでも毎年年賀状をくれます。結婚してお嬢ちゃんが二人生まれたのですが、名前がゆかりちゃん、「このみ」ちゃん。平仮名で書く名前です。あくまでも漢字を使いたくないという信念だったようです。

漢字が好きであるのが嫌いだ、それが、それはもうまったく個人の自由ですが、しかし同じようにおれは片仮名が大好きだとか、「平仮名を見たら虫酸が走る」というようなことはまずありません。アメリカ人の中にローマ字が大好きだとか大嫌いだといふことは、たぶんあり得ない。ではなぜ漢字だけが好き嫌いの対象になるのか。それは文字としては大変面白い現象です。

世界中どこでも言語は一種類の文字で書きますから、いやおうなしにその文字を使わざるを得ないわけですね。そこでは文字が好き嫌いの対象にはならない。ところが漢字はそうではない。漢字を使わなくても

日本語は書けますから、どうしても使わなければならないというものではない。そこで好き嫌いということが起こります。

文字の好き嫌いという点に関しては私なりの解釈があり、上手に使いこなせたらとても便利だが、それを習得するまでにはかなり苦労をさせられるというのが世間にはあります。コンピュータがまさにそれです。いまのコンピュータは随分楽になりましたが、それでも電気屋さんからコンピュータを買ってきて、コンセントにつないでも何にもできません。オープントースターなら買ってきてすべしサが焼けます。CDプレーヤーはコンセントをつなぐと、CDが聞けます。でもコンピュータをコンセントにつないでも、ただの箱です。樽に白菜を入れて板でぶたをし、上にコンピュータを置いたら漬物ぐらには作れるかなあという、これは「コンピュータで漬物を作る方法」という有名な冗談です。

コンピュータを使いこなすためには、それなりに勉強しなければいけません。白動車の運転も同様で、最初は自動車教習所のS字カーブで脱輪したり、仮免で路上を走るときに、隣に座っている教育に思いっきり急ブレーキ踏まれたり、という苦い経験は、皆様の中にもおありではないでしょうか。

上手に使いこなせたらこんな便利なものはない。しかしそれを習得するまでにはかなり苦労させられる、というものに対して好き嫌いというのが起こるわけです。漢字は小学校以来ずっと勉強しなければ

身につけません。現在の小学校では六年間  
で二〇〇六の漢字を学習することが文部科  
学省の学習指導要領で決まっています。一  
般の大人はだいたい二千から二千五百ぐら  
いの漢字を使いますので、一〇〇六字なら  
半分くらいですが、それでもやっぱりすご  
い数ではあります。「いろは」は四十七文字  
ですし、ローマ字は二十六文字で、大文字・  
小文字合わせても五十二文字です。それと  
比べると一〇〇六字というのはやはり大変  
な数で、私も皆様方も「元過ぎれば」  
でも覚えているかもしれませんが、子供のころに  
眠い目をこすりながら、課題として毎日毎  
日勉強させられたはずですよ。だから「そ  
い、漢字が使いこなせるわけです」。

この苦労を途中で放棄する人がいます。  
そういう人は漢字嫌いになります。でも平  
仮名片仮名の習得に苦労はありません。  
ローマ字にもありません。その代わりあま  
り便利な文字でもないわけですね。好き嫌  
いがあるというところが、コンピュータ、  
車、そして漢字の共通点であり、上手に使  
いこなせたら大変便利なものであるがゆえ  
に好き嫌いというものが起るといわけ  
ですね。

いまの日本には常用漢字という規格があ  
り、いま新聞で時々話題になっていますの  
で、ご存知の方もいらっしゃると思います  
が、現在文化庁で常用漢字の改訂作業を  
やっています。私もメンバーの一人であり、  
だいぶ大詰めまで進んでいるので、ここはほ  
ろくは毎週のように東京で会議にきていま  
す。

今回の見直しで、常用漢字がだいたい二  
百字ぐらゐの増えをぞうです。予定では平成二  
十二年春に公布というスケジュールで、ま  
もなくパブリックコメントという意見募集  
が実施される予定ですので、どうぞ積極的  
にご意見をお出しください。

いづれにしても現在の常用漢字は一九四  
五種類の漢字でできていますが、それだけ  
では足りないのが現実で、実際に新聞では  
常用漢字に入っていない漢字も使っていま  
す。たとえば「拉致事件」の「拉」は常用  
漢字に入ってはおりませんが、ほかにも  
「誰」とか「頃」となどが、常用漢字には  
入ってはおりません。「俺」を常用漢字に入  
れるかどうかでこの間審議会で随分もめた  
ことが新聞に載りましたので、ご承知の方  
もいらっしゃると思いますが、意外な漢字  
が入っていないのです。

一方それとは別に、大きな辞書には何万  
字という漢字が載っています。日本で一番  
大きな漢和辞典である「大漢和辞典」は全  
部で十二冊、総収録字数は約五万あります。  
かつて中国の清の時代に「康熙字典」とい  
う辞典が、皇帝の命令によって作られまし  
た。「大漢和辞典」はそれに「鱗」や「峠」  
「峠」というような和製漢字を加えました。  
いまの中国ではさらにそれをしのぐ「漢語  
大字典」が七〇年代にでき、九〇年代には  
『中華字海』というさらに大きな辞書を作  
りました。

いけないのか」と思ってしまうがちです。  
しかしいまの中国語を書くために政府が決  
めている「現代漢語常用字表」は二千五百  
字で作られています。日本の常用漢字より  
ちょっと多い程度であり、中国だつて何万  
もの漢字を使っているわけではありませ  
ん。二千字もあれば中国語を書くのにほと  
んど不自由しません。

それなら大きな辞書に載っている何方も  
の漢字はいったい何だ、ということになり  
ますが、それは歴史とどこかで存在した文  
字がいつかの時代に作られた辞書に収録さ  
れた結果なのです。一度辞書に取り込まれ  
た漢字は、そのあとに作られる辞書にも必  
ず取りこまれます。もともと「この辞書は  
よくできている」という評価される要素の  
一つに、たくさん文字や言葉が収録され  
ているということがあります。これは国語  
辞典や英和辞典でもそうで、「この英和辞典  
は何十万語載っています」と言われると、  
「これですごい辞書だ」と、私たちはつ  
いつい考えてしまいます。でも何十万語の  
うちの九割は、たぶん一般人にはほとんど  
必要ない単語です。漢和辞典も同じで、新  
しく作られた漢和辞典はそれまでに存在し  
た文字を全部取りこんで、それに新しい文  
字をつけ加えていきます。そうすると収録  
字数が史上最大の辞書になるわけですね。  
それが辞書の「売り」であり、時代が新し  
くなるにつれて、どんどん収録字数が増  
えてきます。しかし実際には歴史上どこか  
でちらっと姿を現しただけの、実際には何  
の用例もない「死文字」がほとんどです。

そいつものまで全部引くくるめると何万  
ということになるわけですが、それでもや  
はり二千程度は必要で、二千といえればは  
りかなり多い数です。

漢字の欠点としてとりあげる第二は、そ  
れぞれの文字の画数が多いということだ  
す。平仮名、片仮名、アルファベットなら  
せいせい三画ですが、興味の「興」は十六  
画、小学校で習う漢字で一番画数が多いの  
は「競」と「護」と「護」で、いずれも二  
十画、常用漢字では「鑑」の二十三画が最  
大です。しかし実際の世間では、人権蹂躪  
とか憂鬱とか穿鑿とか置鑿とか、驚くほど  
複雑な漢字が使われることが珍しくありま  
せん。

ときどきクイズ番組に出る問題の一つに  
「一番画数の多い漢字はどれか？」という  
ものがあります。正解はこの「龍」を四つ  
集めた文字で、これで一文字です。こんな  
漢字は書くだけで何分間もかかりますし、  
レポート用紙みたいに罫線の細いものに書  
くにはとても苦労しそうです。

これは明の時代に、世の中に存在する奇  
字を収録することを目的に作られた辞書に  
見える漢字で、「口数が多」という意味と  
されています。龍が四匹もいたらそりゃあ  
うるさいでございしょうね。さてこの漢字の  
画数は、龍一つで十六画ですから六十四画  
になります。これがこれまでの漢字辞書に  
載っている最大画数の漢字ですが、昔の中  
國人だつて、これを書くのは大変です。こ  
れはどこの物好きがおそらく冗談半分で作  
ったものでしょう。それが何かの偶然で

明代のある辞書に載りました。いったん辞書にこの文字が載ると、それからあとの辞書は全部これを収録しますから、「大漢和辞典」にもこの漢字が収録されています。「大漢和辞典」にある総画索引の一番最後をご覧になると、この文字が出てきます。

だからといって、昔の中国人は「あいっはおしゃべりだ」と言うときにこの漢字を使ったというふうなことは決してありません。辞書に載っているのだから、いかにも「昔の中国人はこの字を使って実際に文章を作っていた」と考えてしまいがちですが、そんなことはありません。これはどこの物好きがお遊びで作ったもので、これとわれわれがよく使っている「山」とか「海」などの漢字を同じ重みで考えてはいけません。実際には死文字です。しかし世の中には物好きな人がいて、知識をひけらかしたいのでしょね。落語に出てくる横丁の隠居さんが与太郎に「おめえ、番画数の多い漢字はなにか知っているかい？」というふうな不文で使うのなら勝手ですが、あまりまともな知識とも思えないと私は考えています。

こうしてデメリットばかりあげてきましたが、じゃあ漢字って欠点ばかりかというところでもないのです。特に最大の長所はさきほど申しました表意文字という点です。

表意文字と表音文字のちがいについて端的に申しますと、公圃、公書、公民館、公立、公衆、この五つの言葉には最初に「公」という漢字があります。この「公」という

漢字からは、「みんなのための」という意味を取り出すことができますね。みんなのためのであったり、みんなの苦害になるのも「公」という字で「パブリック」という意味を、そこから取り出すことができます。

それに対して、bat・ball・book・bag・boy という英単語の最初にはbがありすが、このbには共通の意味がありません。この「b」は上と下の唇が一度ふさがって、それが摩擦するときの音を表しているだけです。これが「表音文字」というものです。われわれは英語をまず中学校で勉強し、かなり苦労させられます。そして「アメリカ人やイギリス人ならどんな単語を見ても意味が全部分かる。われわれが英和辞典を引かなければならないのは日本人だからで、アメリカ人やイギリス人だったら雑誌や新聞に載っている単語は辞書を引かなくても全部分かる」と、ついつい考えてしまいがちですが、これは実はとんでもないまちがいで、彼らにも分からない単語はいっぱいあるのです。

例えば「風力計」。小学校の屋上でカラカラと回っている、軽量カップをくびらしたような、風の力を測る道具ですね。英語ではanemometerといいます。が「アニモミーター」の「アニモ」は、ギリシャ語の「風」という意味だそうです。アネモネという花がありますね。ギリシャ神話では春になって風の神様が最初に咲かせる花がアネモネだそうで、だから花の名前になって

います。「アニモミーター」という単語は「アニモ」と「ミーター」、メーターの組み合わせでできあがっているわけです。

ギリシャ語はラテン語とともにヨーロッパ文明の根源にある言語です。それはちょうどかつて日本の文化の基礎に漢文や仏典があったのと同じことです。日本でも明治の知識人たちの漢文の力は驚くべきもので、漱石や鴎外などの文章には漢文の語彙があふれています。私など中国文学科を卒業して「漢文の専門家ぞこい」という顔をしています。ちなみに漱石はロンドンへ留学した英文学者です、鴎外はベルリンへ留学した医者です。その英文学者であり医者ですら、あの漢文の知識です。それが明治の人々の教養だったわけです。

一方、戦後の日本人でインテリとされる方々における漢字漢文の知識は惨憺たるものです。同様に、いまのアメリカやヨーロッパの知識人の中でラテン語やギリシャ語はほとんど絶滅状態と申し上げていいと思います。学校ではラテン語やギリシャ語の授業が一応あるそうですが、それは日本の高校で源氏物語を習うようなもので、「単位さえ取れば、それでよい」という程度だそうです。いまの欧米のインテリの中には、もはやギリシャ語とかラテン語は中心には位置していません。それはちょうどわれわれにおいて、漢文とか仏教がすべての知識人のルーツにあるとは言えないのと同じことです。

「ター」の「アニモ」がギリシャ語の「風」であるということが分かるインテリは、実は非常に少ないわけです。だから「アニモミーター」という言葉が分からない。しかしわれわれは「風力計」という三文字を見ますと、「風の力を計る道具だな」と小学生でも分かる。同様に「草食性」の意味は小学生でも分かりますが、「草食性」にあたる英語「herbivorous」はラテン語に由来するのだそうです。

ほかにも「高所恐怖症」(acrophobia)や「乾皮症」(xeroderma)、冬に皮膚が乾燥する病氣)という言葉では日本語なら「皮膚が乾く病氣だ」と分かります。

このような単語をアメリカやイギリスの街角を歩いている一般人に見せても、さあ何割分かるでしょうか。実際に私は「乾皮症」にあたるxerodermaをアメリカ人の先生に見せましたが、その方は「分かりませんでした。何のことですか？」と逆にたずねてきました。ハーバード大学を卒業した助教ですけれども、この単語が分かりませんでした。

これが表意文字と表音文字のちがいであり、表意文字はそれぞれの漢字の意味を組みあわせていくと全体の単語が理解できます。英語でもギリシャ語やラテン語にまで戻るとわかりますが、ただギリシャ語ラテン語は現実にはもうほとんど字ばれしていないので、実際には役に立ちません。さらに漢字は新しい事物の命名に効果を発揮します。

私の前でタバコを吸わないでくださいと

主張する権利が、一九八〇年代半ばぐらいから主張されるようになった。そういう権利が確立されると、それに名前をつけなければならぬ。こうして作られたのが「嫌煙権」ですが、たった三文字の漢字で見事にこれを表現しています。突然現れた新しい観念が、「嫌煙権」という三文字で示されると、「あ、タバコを嫌う権利か」と万人に理解できるわけです。

もう二例あげます。「歩行者天国」は、一八五八年八月に銀座四丁目で初めておこなわれたそうですが、この言い方も見事に定着しました。近ごろは「ホコテン」というようにですが、「ホコテン」という略称が定着するのは、歩行者天国という名称が定着したから、それを縮めた言葉ができたわけですね。

皆様の中にも「外反母趾」でなやんでいる方がいらっしゃるかもしれません。私の家内が外反母趾でなやんでおり、あるとき「ねえちょっと見て、私の足こうなっているよ」と、いきなり足を見せつけてきたとき、私は同情するより先に、「なるほど外反母趾とは上手に表現したものだなあ」とつぶやき、むくれられた経験があります。確かに親指が外側に反り返っています。この名称をつけたのは多分お医者さんでしょうけど、実に見事に命名されたなあと感じます。これを英語でいうのはさぞかし大変でしょう。

もうずいぶん前ですが、一時期には漢字を遅れた文字ととらえる議論がいろいろありました。しかしそれぞれの漢字が意味を

表しているおかげで、私たちはずいぶんありがたいた恩恵をうむっているということをごに挙げました例をお考えいただいたら、お分かりいただけるのではないかと思います。

では次に、漢字の歴史について簡単に話します。

漢字は世界で一番古い文字というわけではありません。世界で一番古い文字はメソポタミアのあるウルカという遺跡から発見された粘土板に刻まれた原始的な象形文字で、紀元前三五〇〇年と推定されておりま

す。続いて楔形文字が登場し、さらに続いてエジプトのパピルスに書かれた象形文字「ヒエログリフ」が登場します。

紀元前三〇〇〇年ぐらいにはメソポタミアやエジプトで文字が使われています。一方、中国で文字が使われるのはずっとあとで、紀元前一三〇〇年ぐらいと推定されます。つまり中国の文字は世界で一番古い文字というわけではありません。しかしいまのエジプトやイラクのあたりで使われている文字はアラビア文字で、それはかつての楔形文字やヒエログリフとは何の関係もありません。楔形文字やヒエログリフは、いつのまにか断絶してしまいました。

いまヒエログリフは解説できますが、あれはまったく偶然の結果です。昔ナポレオンがエジプトを侵略して兵を出しました。そのナポレオンに対してイギリスが討伐の

軍隊を送りこみ、地中海の一番奥でフランス対イギリスの戦争が起りました。ナポレオンはイギリス軍隊を迎え撃つため、ナ

イル川河口にあるロゼッタという町で、対イギリスの要塞を造ろうとし、その工事の中で一枚の石碑が発見されました。ロゼッタというところから出たから「ロゼッタストーン」と名づけられたその石碑は、いま大英博物館に展示されていますが、それはヒエログリフとその筆記体と古代のギリ

シャ語と同じ文章が三種類で書かれている、対訳の石碑でした。それが発見されたから、ようやくエジプトの象形文字は解説が可能になったのです。もしもそれが発見されていなかったら、あの文字はおそらくいまだに未解説であるはずで、歴史にも「もしも」という仮定をもつけるのは禁物ですが、もしもナポレオンがエジプトに行かなかったら、もしもロゼッタストーンが発見されていなかったら、ヒエログリフはまだ解説されていないかもしれないのです。

ところが漢字は、中国や日本でいまも使われ続けています。ここに「山、牛、家、川、林、高」という字の明朝体と甲骨文字の字形を掲げておきました。いまのわれわれは明朝体を使っていますが、年賀状では「謹賀新年」を草書体で書く方もおられるでしょう。そんな賀状をいただいても、私などはどれが「謹」でどれが「賀」で、ど

れが「新」でどれが「年」なのか分かりません。草書を書いたり読んだりする修練を積んでいない限り、それは読めません。しかしこの書体は自分には読み書きできないけれど、草書体という書体であるということは何となくわかりますので、この葉書

には漢字が書かれていることが分かるわけ

です。

博物館にいけば、鎌倉時代や室町、あるいは江戸時代の写本があって、草書体であざやかに書かれています。先生方はもちろんお分かりでしょうけども、一般人で草書の学習をしたことがない人間には読めません。この手紙に書かれている文章を私は理解できませんが、それでもそこに日本語が書かれているということが分かります。理解できないのに、どうしてそれが日本語であると分かるのでしょうか。それは私には「草書体」という知識があるからです。漢

字には書体というものがあるという知識を持っていてから、これは草書体で書かれた日本語なのだとかわかるのです。唐代の有名な書家である懷素の「自叙帖」なんて、あんなもの読めるものじゃないと私は思いますが、しかし「狂草」で書かれた文字が漢字であると認識できるのは、そんな書体があること知っているからにはかなりません。

その書体を知らなかったら、どこかの子供の落書きと思われても不思議ではないでしょう。

漢字と接するとき私たちが「書体」という知識を活用します。

ここに甲骨文字の字形を掲げました。ぱっと見たところ、普通の楷書の漢字とは大きくかけ離れています。しかしそれは甲骨文字という書体だと考えれば、それが漢字であることは自明です。

甲骨文字とは、紀元前一三〇〇年から約三百年ほどのあいだ、亀の甲羅や牛の骨で占いをし、後で「いつだれがこんなことを



占った」という内容と結果を銅のナイフで刻みこんだものです。これがいま見ることが出来る最古の漢字ですが、文字を書くという行為そのものは、毛筆で紙に草書体で書くのと全く同じことです。つまり筆で書くかナイフで書くか、紙に書くか骨に書くか、草書で書くか行書で書くか、隸書で書くか甲骨文字で書くかということですね。

紀元前一三〇〇年すなわち三千三百年ほど前の時代から現在に至るまで、漢字は同じ文字をちがう書体で書いてきたといつていいです。三千年間、文字のシステムは変わっておらず、見掛けの書体がちがうというだけの話です。こんな文字は漢字以外、世界のどこにもありません。

甲骨文字は十九世紀末期に突然存在が明らかになりますが、それからほとんどなくして、だいたい文字が解読できるよつになりました。古代文字とはいっても、要するに同じ漢字をちがう書体で書いていただけの話です。これが漢字の重要な点であり、紀元前千何百年という時代にすでに文書があった、それをわれわれはあまり苦労せずに読むことができる、考えて見ればこれはすごいことです。三千年以上も前の記録をそんなに苦労せずに読めるわけです。少なくとも私から見ると、草書体を読むよりはるかに楽だと思えます。

さて文字の長い歴史の中で、さまざまに変遷を経て漢字は発展してきましたが、ここからちょっとお遊びの世界に入らせていただこうかと思えます。

昨年の十月ぐらいにアメリカに呼ばれま

した。これまでに中国には五十数回おこなっておりですがアメリカはじめてでした。西海岸を中心に合計五回、「漢字に関する講演をしろ」という依頼を受けたのです。私は日本語でしゃべり、現地の方が通訳をしてくださったのですが、聴衆は現地の学生さんと社会人で、毎回五十人から百人ぐらいの方が聞いてくださいました。

ローマ字で文章を書く人々に対して「表意文字ってこういうものですよ」という説明をしてきたわけですが、これはそのときに使った資料です。

「母」と「女」という漢字で、「女」という集合の中に「母」という集合があるわけですね。「女」という甲骨文字は、手を前に組み合わせてひざまずいている形です。男尊女卑だった時代ですから、女性が一段下に隷属させられていたころに作られた象形文字です。ちなみに私の家ではこの形で「お父さん」と読むことになっているといつのは冗談ですが、いすれにしても手を前に組み合わせ、ひざまずいている従順な形で「女」という意味を表しています。現在の世界では、こういうことはまあめつたにないでしょうね。いまだしたら、これで男と読むのだからと思えます。

さてこの中に点を二つ加えると「母」という字になります。いまの「母」にある点は二つの乳房です。母は必ず女ですが、女は必ずしも母ではありません。では女と母はどこがちがうかといつと、それは赤ちゃんに授乳した経験があるかないかといつてことです。それで古代中国人は、女という集合

の中から母という小さな集合を切り出した。乳房は男にもありますし、人間である限り必ず乳首があります。女性であればふくよかな、まあふくよかではない方もいらっしゃるかもしれませんが、乳房を持っているのが、乳房は授乳のためのものであり、それを強調すること、女と母を区別しました。

次はその「女」がほうきを持つている形で、「婦」という漢字です。これは女性解放論者から目のかたきになれる評判の悪い漢字で、「漢字は非常に封建的な思想を内包しているけしからん。『婦』という字は女性を家事労働に縛りつける作り方をしている」と、目をつりあげて非難する方が時々いらっしゃいます。

「婦」が「女」と「ほうき」からできていることは事実です。ただこの「婦」の用例を調べますと、とつとつ一般の女性ではないようです。「婦」は大変身分の高い女性であり、戦争のときに「婦某」が何千人もの兵士を率いて戦争に行つていいだろうか、という占いがたくさんあります。「婦ほしはしは軍隊を率いて隣の国に攻めていくときのリダー」という形で出てくるのです。とはいっても、どうも女将軍でもないみたい

です。甲骨文字に一般の女性は「女」という字で出てきます。それに対して「婦」はクインという意味で使われているにちがいないと考えられ、その人が兵隊を率いるといつのは、おそらくお妃の実家の父親が戦争の指導者になるといつことによつてです。この漢字は王室中の最高の地位を持つ女

性、お后という意味で使われています。じゃあなぜ「ほうき」なのかといつていふようになりますが、この「ほうき」は神様をお祭りする神聖な祭壇を清めるためのものでした。地上と空には目に見えないはしごがかつていて、神様はそのはしごを伝わって天と地を行き来しています。しかし空に向かつて「いまから神様をお祭りしますよ」と呼びかけても、神様には聞こえません。神との交信には匂いを使いました。地上で動物の肉を焼くと、かぐわしい匂いが空に漂います。空にいる神様は、「おや、あそいでパーベキューをしているな」といつことで地上に降りてこられます。要するに食べ物をおひき寄せるといつわけですが、そうやって神様を地上にお招きしてお祭りをします。

そのお祭りで神が着座される神棚は、汚れてはいけない神聖な場所です。その神聖な場所を清めることができるのは、その辺の一般人にはできない仕事で、それを清めることができるのは最高級の女性です。その最高級の女性という地位を表すために使われた道具が「ほうき」でした。

次もアメリカで使つたスライドです。ここに三つのイラストがあります。最初は人間が二人、背中を向け合っています。次は容器に盛られたちこそうに向かつてよだれをたらしている人、つまりこれから食べようとしている人と、反対におなががいっぱいでちこそうから顔をそむけている人がいます。これを甲骨文字で書くことのような形になります。実際にアメリカでやつたときは答えをかくして、どういつ意味かを



考えていただきました。

二人の人が背きあっているのは「北」です。この漢字はもと「人間の背中」であるいは「背きあう」という意味を表す文字でした。それが、人が太陽に向かったときに背中のある方が北であることから、やがて方角を意味するようになりました。方角という概念は大変抽象的なものですが、目に見える形で表現するのが困難です。実際に東西南北はすべてちがう作り方で表現しますが、何時でも太陽に向かえば、背中は必ず北向きになります。北東か北西かは時刻によってちがいますが、北は太陽を見たとき背中にある方角なので、「背中」という意味の漢字がやがて「ノース」という抽象的な方角という意味で使われるようになったので、改めてこの下に肉づきをつけて、本来の「背中」という意味を表しました。ちなみに戦いに負けて背中を見せて逃げるときを「敗北」といいますが、それは北に逃げることでありませんが、東に逃げても南に逃げて北向きですが、背中を見せ逃げるから「敗北」というわけです。

二番目と三番目はよくできた字だと思えますが、「これからまもなく」という意味を食べよとじている「形から」、「これからまもなく」という意味を表します。もうひとつは「いどがらもついでに終わった」という意味で、このつは口の向きがちがうだけですね。もうおわかりと思いますが、最初が「即」、あとが「既」です。こんな抽象的な概念を、たった一文字で、見たとたんに理解できるというのは非常に優れた作り方ですし、「あなるほ」と、たぐさんのアメリカ人がうなずいていました。ところで、ここまでにお話した漢字は、すべて中国で作られた文字であるにもかかわらず、中国語の知識がまったくなくても理解できます。要するに国際的な文字だということです。表意文字には特定の言語には寄りかからないという特性があるわけが、とおわかりいただけると思います。

次はたなびいている旗のもとに人間が何人も並んでいます。まるでバック旅行で添乗員さんが持っている旗にしたがう人々です。そしてこれは「旅」という漢字なのですが、しかし現代的な旅行のイメージでこれを考えることもないまぢがいです。年配の方なら「存じ」と思いますが、軍隊の編成単位に「旅団」というものがあります。第何旅団という言葉が、かつての日本の軍隊にありました。あの旅団の「旅」がこの字本来の意味であり、旗印のもとに兵士が何人も並んでいる形がこの字です。「旅」とはもと戦争のために軍隊を編成していくことでした。個人の希望や娯楽のために家から離れたところに移動するという「旅行」という行為は非常に新しい時代の産物であり、生活に豊かな状況ができるまでは、移動は苦しいものであったにちがいないと思います。

ちなみにいまの漢和辞典で「旅」は「方」という四画の部首に入っていますが、古い漢字の辞典では、この「方」と上の部分をあわせた六画で部首になっています。ほかにも「旗」や「族」「旋」なども同じ部首に属します。この旗印の下に「矢」を置き、それに向かつて同結を誓う人々を「族」と呼ぶわけです。

象は古代中国には野生でおりました。だから「象」という象形文字が作られているわけです。昔銅器の中にも、象を大変写実的にかたどったものがあります。また「象」を捕まえることができるかという山いが、甲冑の中に出ています。象は黄河中流域に野生でいたようで、その象の鼻のところが手でつかんでいるのが「為」という漢字です。そこから「仕事を為す」という意味に使われます。いまでもタイあたりでは象は材木運搬のための重要な役畜として働いていますが、昔の中国でもそれと同じことがおこなわれていました。

次は稲と鎌を並べた形で、この文字はもと「鋭い」という意味でした。それが鋭利な刃物というときの「利」です。つまり稲を鎌でスパッと断ち切ることで、そこから「鋭い」という意味を表しましたが、鋭い刃物で収穫をする効率よくたくさん収穫物が取れるので、やがて「利益」という意味になりました。利益の「利」は鋭利の「利」であり、だから禾（こめ）と刀の組み合わせてこの文字ができています。というふうなことを小学校でも教えていたんだけど、子供たちも興味を持ってくるとはなにかと思えます。

次のこの形はアメリカ人には結局分かりません。無理もないかと思えます。これは牛の角を刀で切り取っている形です。牛と刀と角と聞けば、日本人なら「あ

「解」だ。なるほど。分解というのはこからくるのか」と分かります。でもこの漢字を見たこともないアメリカ人に「牛の角を刀でもぎ取っている形です。さてどういう意味でしょう？」と聞いても、正解は出ませんでした。われわれとしては「solve」という答えが欲しかったのですが、結局出ませんでした。

次は女と子供が左右に並んでいます。これは「好」で、女が自分の子供をかわいがることから「好き好む」という意味になります。そして女性にとって自分の子供はとてもいいものですから、さらに「よい」という意味も表します。「好む」と「よい」は母親が子供を好み、宝物としてかわいがることからできているわけです。

さて、ここまで見たとたんにわかる、簡単な漢字を取りあげてきました。しかしいまのわれわれの前には数千あるいは数万もの漢字があります。それらはいったいどのようにしてできてきたのでしょうか。

ここで仮に私と皆様方が古代中国における「漢字制作委員会」のメンバーであるとしましょう。じゃあ私が指名しますから、指名された人は自分が作った漢字を答えてください。「では田中さん」「はい、山という字ができました」「なるほど。では山田さん」「はい私は魚という字を作りました。」「うまくできましたね。では松本さん」「はい、私は太陽を表す日という漢字を作りました。」「ふむふむ、では大山さん。」「僕は財という漢字を作りました。」「うそをいってはいけません！」

最初から「財」という漢字ができるはずがありません。「財」という漢字は、あらかじめ「口」と「才」という二つのパーツができていない限り、できるわけがありません。同様に「崎」は「山」と「奇」字があらかじめ存在しない限り、作られるはずがありません。

つまり漢字は、第一段階として作られる文字群があって、さらに第二段階として、第一段階で作られた文字を組みあわせて作られてきた、というわけです。第一段階で作られる漢字は、それ以上分割することができない最小限の単位であり、「魚、山、川」などがこれにあたります。

第一段階で漢字を作るとき、目に見える事物を具体的にたどったものを「象形文字」といいます。動物とか「女、雨、木、月」ですね。このように目に見えるもののほかにも、抽象的な概念を表すものがあり、たとえば包丁は目に見えますが、そこに写っている刃だけを取り出すことはできません。だからまず「刀」という字を書き、それに「マ」ですとマークをつけて「刃」を表しました。「木」は象形文字ですが、木の根元だけ書くことは不可能です。だから、「木のうちのマ」ですと、「マ」マークをつけたのが「本」という漢字です。このようにマークをつけることで抽象的な概念を表す方法を「指事」と呼びます。

この「象形」と「指事」という方法で、まず第一群の漢字が作られました。そしてさらに、それを組みあわせてより複雑な概念を表していったのですが、そのときには

二つの方法が使われました。

最初はそれぞれの要素の意味を組みあわせる方法で、それを「会意」といいます。たとえば「信」は「人間」という意味を表す文字と「言葉」という文字の組みあわせで、人間の言葉だからまこと、誠実という意味を表します。

「戈」は武器を表す文字です。それに「ス」トップする「止」を組みあわせると「武」になります。そこから「武すなわち木当の勇氣」というのは、武器の使用を停止することだ」という有名な理論ができました。海に向こうのどこの国の政治家に聞かしてやりたいぐらいの話ですよ。

そのような意味の組みあわせのほかにもう一つ、文字の発音を利用するという方法があって、それを「形声」といいます。

「人」と「九」を組みあわせると「仇」になります。「鳥」と「九」では「鳩」になります。それでは「仇」と「鳩」における「九」とはいつたなんだろうか。親のかたきは九人いるとは限らないし、鳩の巣には雛がかならず九羽いるとは限りません。そう考えると、この「九」は数字の「ナイン」という意味ではないことがわかります。

文字ができるのは前から、音声による言葉はありました。もともと親のかたきもハトという鳥も、古代の中国語では「キユウ」という発音だったとお考えください。つまり父を殺された人は「あいつのために私の父は死んでしまった。あいつは父の不倶戴天の「キユウ」である」と語り、「ほら

太郎ちゃん、公園にポッポと鳴いているかわいい「キユウ」という鳥がいるから、豆をあげに行こうね」と話しかけながら、おはあちゃんが孫の手を引いて公園に行きます。その段階では、かたきもハトもまた文字はありません。それがやがて文字になるときに、親の不倶戴天のかたきなら「鳥」公園でポッポと鳴いている鳥なら「鳥」で意味を示して、それとともに「人」「キユウ」という発音を示すマークをつけておくことだ、鳥に関してキユウだから「ハト」のことだと分かります。

漢字のうちの大部分は、主として右側に発音を表す文字がついています。

ちょっと難しいですが「歎歎」という言葉があります。ご存じの方もたくさんいらっしゃると思いますが、これは「むせび泣く、すすり泣く」という意味です。太平治の「走れメロス」が中学校の国語教科書に載っていますので、実際にはいまの高校生や大学生のうちの何割かは見ているはずですが、ほとんどの学生は覚えていないでしょう。そして皆様方のなかにも、こんな漢字はじめて見たという方もたくさんいらっしゃるだろうと思います。

この言葉、「すすり泣く」という意味ですが、では何を泣くのでしょうか。まったくの当りすっぽりでかまいません。まちがたって笑いません。ダメもで、何と読むかを想像していただければいいか。さ、何でしょう。「本当にまちがっても笑わない。ばかにしない。じゃあ「きよき」

かな?。正解です。これは「きよき」と読みます。

はじめて見た言葉なせ「きよき」と読めるのでしょうか。それは「虚」と「希」が文字の中の一部分に入っているからにほかなりません。私たちは感覚的に、漢字のうちのどこの部分に発音が隠されているというところを経験的に知っているのです。だからはじめて見た漢字なのに、「どういふふうに読むのかなあ」と推測できますし、だいたいそれは当たります。このように漢字のどこの部分に発音が表されているのは、もともと文字が作られる前の音声による言語がそこで表されているということですから、それが「形声文字」というものです。

ここまでにお話しした4種の方法でたくさん漢字が作られてきたわけですが、最後に漢字と視覚について考えましょう。

先ほどとりあげた「北」と同じ構造の漢字に、「並」と「従」があります。「従」は古い形では「从」と書き、前の人間の後ろにもう一人の人間が並んでいる形です。これに道を表す「ぎょうにんべん」と、足跡の形を加えたのが「従」です。それを戦後の当用漢字や常用漢字では「従」と、「从」の部分を「ちんちん」に変えました。

こうして「従」と簡単にされましたが、さて簡略化することで何画減ったのでしょうか。実はたった一画減っただけです。「従」という漢字の心臓部は、右上にある「从」の部分です。その部分から「き従う」という意味が出てくるのですが、しかし「従」という形ではそれがまったくわかりませ

ん。思えば戦後の当用漢字というのは随分罪なことをしてくれたものです。

続いていくつか、視覚を利用する漢字をご覧いただきます。「出は囲いの中から足跡が外へ出ようとしている形。人間が立っているわき腹に矢が当たろうとしている形、これは「疾」ですね。次は「逆」。道と足跡があり、一人は下から上に向かい、もう一人は上から下に進んでいきます。つまり下の足跡はお出迎えに行っている形です。「逆」はもともと出迎えに行くことで、やがて方角が逆だから、「あへへへ」という意味になりました。

ここに四つ辻があり、真ん中に武器があります。その周囲に足跡がありますが、下の足跡は右から左へ、上の足跡は左から右へ、城壁のまわりをぐるぐる回るとパトロールしています。これが「衛」で、だから防衛というように「まもる」という意味になるのです。

さて、ここまで私は日本語を使って、日本人の皆様にご話してきました。しかし先ほども申しましたように、アメリカで英語を使って説明したこともございますし、パリで開かれた国際シンポジウムの席では、中国人とフランス人の学者に対して中国語とフランス語で説明したこともあります。数年前にイタリアのナポリへ講義にいったときには、イタリア語の通訳を介して、イタリア人の学生さんにご話をしました。

高速道路を走っていると、フォークとナイフが並んでいる絵があって、「あと何キロ走ったらレストランがある」とわかります。

しかしそれは日本人にわかるだけでなく、アメリカ人にもエジプト人にもインド人にも同じように分かります。このホールにもありますが、光が見えてくる方向に駆け出そうとしている「非常口」のサインがあります。これは世界共通です。

このような「ピクトグラム」は、特定の言語に頼らずに、意味を効率よく伝達するための記号、ツールとして、いまの情報化社会で大変重要視されている情報伝達ツールです。特にピクトグラムは国際空港とかオリンピック会場とか、さまざまな言語を使う人が集まるところで大きな効果を発揮します。英語は万能ではありませんから、英語がしゃべれない人も実際には大量にいます。だから英語だけでは通じない。また子供は書かれた文字が分かりません。だからさまざまな言語が集まる場、あるいは文章を理解できない人々のために、視覚情報として情報伝達するピクトグラムが、世界中あちこちでたくさん使われています。

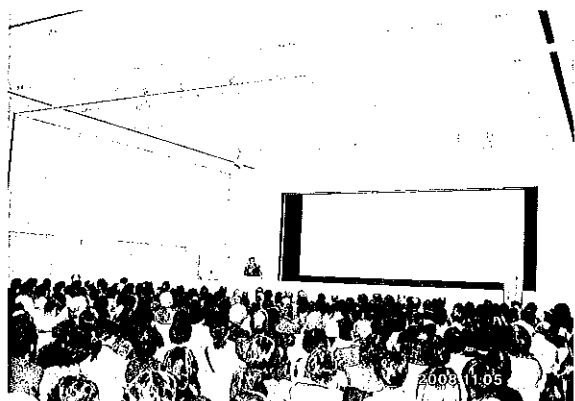
漢字は実は三千年前のピクトグラムでした。いま日本語や中国語や英語で文章を書いたら、それぞれの言語を理解できる人しか通じません。それに対して視覚に訴える文字をツールとして情報化社会に生かすことが、一番効率のいい、そして万人に平等に伝達できる情報手段なのですが、それは実は世界で一番長く使われている文字の最古の形に示されていました。

先生方の作品で、あるいは私どもの授業で漢字を取りあげるときに、漢字を時代遅

れの文字としてではなく、実はいま一番進んでいる文字なのだと思いをもちましよう。欧米のローマ字が進んでいて、漢字は遅れているという認識ではなくて、漢字のビジュアルに訴える形が、これから先、何よりも要求されると認識していただければ、こういう暗れがましい場所じゃべらしていただいた甲斐があったかと思えます。

ご静聴ありがとうございました。

講演会風景



書畫文房四宝

# 榮豐齋

〒101-0048 千代田区神田司町2-8-4  
電話 (03) 3258-9088  
FAX (03) 3258-9089

**定休日** 第1・3・5日曜日  
**営業時間** 午前10時～午後7時  
日曜祝日は午後6時

筆・墨・硯・法帖  
画仙紙・仮名料紙  
書道用紙専門店

九段下

# 玉川堂

(御報カタログ送呈)

東京都千代田区神田神保町3-3  
〒101-0051 電話03(3264)3741  
地下鉄・東西線・新宿線九段駅下車

# 花仙

墨の暢び・墨色のよさ、ことに淡墨にしたときの墨痕の鮮明さ・にじみの美しさは、良質な古墨をすった液墨に匹敵する画期的な液墨です。

開明墨汁本社 創業 1898年

## \*開明株式会社

本社・工場 埼玉県さいたま市緑区原山2-22-20  
TEL.048(882)1091代 336-0931